

96歳

画業は一生の道

入江子シルクロード
記念館館長・画家 入江一子

シルクロードを旅して三十か国以上を訪れ、その感動を、大胆かつ繊細に表現してきた画家・入江一子氏。御歳九十六、さらなる高みを目指してなお画業に励まんとする氏の歩みを伺った。



いりえ かずこ——大正5年韓国大邱生まれ。小学校6年の時に描いた動物画が昭和の御大典で天皇に奉納されるなど、早から才覚を現す。昭和13年女子美術専門学校(現・女子美術大学)卒業後、洋画家・林武氏に師事し、以降、独立美術協会会員、女流画家協会委員(創立会員)として画壇をリードする。平成12年入江一子シルクロード記念館を阿佐ヶ谷(東京都)に設立し、館長に就任。

シルクロードを
描き続けて四十余年

——このシルクロード記念館には、大きな絵がたくさん飾られていますね、凄く迫力です。

入江 いまでも描いているのは、二百画がほとんどですね。

私は五十三歳の時シルクロードに魅かれて、以後三十か国以上を訪れ、大傑的な風物や辺境に生きる人々を描き続けてきました。当館にある作品の大半もシルクロードをテーマにしたものです。

絵はまず現地でも写生してきて、それを二百画に仕上げますので、

去年は銀座の三越で展覧をしたのですが、その時にこの、四姉妹山嵐の青いケケンという大きな絵が売れたんですよ。ちょうど病院が改築される機会だからと、立川中央病院の院長がご覧になって、すくまうと求られて。

患者さんの気持ちも癒やされそうですね、いい絵ですね。

入江 あちがうございませ。私ももうこれに慣れておくよなと、病院で大切にしてくれたほうがいいと思います。三越でも二百号の絵が売れることは少ないと、とても喜んでいただきました。

ここに描かれているのが美しい山で、標高四百三十百、登った山は七十八歳の時ですが、二十時間着いたら歩きまわしたから、もう若い人ならフラフラです。その上、電気も水通らないような場所ですけれど、テントで二日間宿泊をしながら、命がけからという状態でした。

こんな岩山も、美しい花が咲くのもですね。

入江 そう、もうびっくりするくらい、人間も滅多にないんですよ、世界の顔より多岐多岐なケケンの花が、ガラガラ岩の岩に懸命に咲いている。

芸術の道に
終わりは無い

——いまでも後進の指導を続けておられますか。

入江 はい。実は昨年グループ展が済んだばかりなのですが、青山の文化センターで展覧会を開いて、グループ毎に別室を三十二回目、皆さんは三年來教室に来ていて、当時若い二婦人だった方も七十歳を越えました(笑)。

実は鎌倉にも教室があった、あそこも三十年が経ちますが、やはり生徒さんは続けて来てくださいます。私は電車を乗り継いで向かうのですが、去年まではうつと一人で رفتってました。

果したるべき責任と
生きる目的

入江さんは、小さな頃から絵がお好きだったのですか。

入江 はい。私は五年に韓国で生きましたが大が、小学校一年の頃からよく絵を描いていました。小学校五年の夏休みの時、皆が一枚ずつ宿題の絵を描いていくんですけど、私、それを毎日描いてね、全部で四十枚持っていました。

そしてた校長先生が、「おまえはよくやね」と頭を撫でてくれました。女学校に入ってから毎日一枚ずつ描きましたが、それが私の果たすべき責任であり、生き

実際に専念するのは二か月間くらいですね。これにシルクロードの花屋さん、こちらはワグナスタンの石仏、あちらはイスラムの寺院……。

——世界中あちこちを回ってられたんですね。

入江 今年で九十六歳ですが、よく働いているほうだと思います(笑)。

この館を建てたのは十三年前ですが、たが、つい最近五年年齢のことなて考えたことになった。それが九十歳の時、過年の無理が祟って、腰を圧迫骨折してしまいました。

——高齢での骨折は特に大変だと聞きますが。

入江 ところがね、もうなんとして、もう一度歩くとやらうとうと気持ちいいと、ちゃんと歩いてるようになるんです。天の恵みか、私はシルクロードをずっと歩いてきたので、体が頑丈にできているのかもしれない。記念館に来られた皆さんにも、モチヨチですが、ご案内することがあります。

皆さんも驚かされるでしょうね。

入江 はい、皆さん、喜んでいただけて、「写真と一緒に撮らせてください」とよく言われますね。

——早くから将来の道を決めておられたのですか。

入江 いえ、実際に絵描きで生活して、このように気持ちになったのはもっと後のことでした。

女学校四年の時、京城(現ソウル)で絵の展覧会があることを知って出品してみたところ、入選し、その勢いで今後は朝鮮(朝鮮美術展覧会)に挑戦したいんです。先生と私と友人の三人で出品したら、三人とも一緒に入選して話題になり、新聞にも大きく取り上げられました。

早くから注目されていたので、早稲田の女子美術学校を卒業して、日本の女子美術専門学校(現・女子美術大学)に入ったのは昭和九年です。当時は韓国から日本行く人は少なく、運船に乗って釜山から下関へ、さらに一昼夜汽車に乗って初めて東京へ行きました。

そして学校を卒業する時に、どこか作品を発表したいと思ったので、独展展に出品したのがきっかけで、洋画家の林武先生とも巡り合ったんです。そしていつの間にか私も絵描きになり、先生